

第10回「街並みの美学」トラベルスカラシップ

研究旅行のテーマ：都市における歴史遺産の価値と街と自然との調和。

卒業設計を終えてのこれからを見開けて。

産業遺産である古びた工場の跡を残していく日立銅山の港が残っています。そんな中で土地のオーナーの方々が残さざるを得ないままにするのではなく生き残す方法がないかと考えた。銅山という都市が残していく工場跡に対しての歴史という記憶が次代にも傳承される形で残していく形という事である。「解消させず、相手としての街並みで残していく事か」と私は、銅山においては解消せなければならぬ。そこで多くの住みがめつされた歴史の積み重ねがあるからだ。

しかし、それらの歴史をしっかりと現在に伝えることは難しい。何時頃のどうな空間がどれだけ残っているかなどは、「生きている都市」になってそれを説いてしまうと歴史がある方がより伝達力が高まる。この理由で整理すること。そのままの状態を文化化して。この提案は、単に美しい風景を創出したりではなく、その都市の歴史も物語として街並みにいたる地図や音楽など多角的に表現する事である。

これまで何より特筆すべきは、これまで土地といいながらどちらかというと人々から疎遠されてきた鉱山を、人々に愛され活用されるべき現地の資源を意識して活用する点である。

これ実現をつかむ所までにして。以後、必要適応と保全。また公園等で活用する資源が世界的ではなく「日本」いう要素がある。全国の「節」での開拓を含む歴史資源を活用することが残念で胸が痛む思いになります。



卒業設計のタイトルと概要

タイトル：「悲壯淋漓-日立銅山の煙突による歴史的空間の再編」

日立の発展に一役買った日立銅山は、産業としての歴史を持つ。様々な記憶が詰まつたこの土地を更新し、生きた空間を再編する。自然そのもののを感じる場所であり、更新後も記憶が蓄積する場所の提案。煙害という負の遺産をもつ粗鋼の精錬工場遺構にどう向き合うか。廃棄物である「カラミ」、煙害をもたらした粉塵機、工場のシンボルだった大煙突のそれぞれに、新しい役割を与えて、はげ山となった山々と共に人の新しい場に変更しようとする計画。過去の記憶にまっすぐに向き合う場を作る

訪問予定の世界各国都市・指針書・建築物

ドイツ・ダッセン/ガス・ワークス・パーク「ドイツ最大の炭鉱」

アメリカ・シアトル/ガス・ワークス・パーク「世界初の工業跡地が公園」

ヨーロッパ/Eisen

ヨーロッパのヨーロッパには有名なガラスファクトリを起きた。H&Aエルシャーバーが工業地域としての長い歴史をもつた工場跡地に再生させたモデルを提供した。ヨーロッパは500万人を雇う大都市圏ではあるが、それは日本の市町村に匹敵しておらず、お互いに協働することを避けているため、行政行為はない等といった状況であった。しかし、H&Aエルシャーバーがヨーロッパで一つのモデルとして認識されるところだ。ヨーロッパは内閣組織された工業地域といいイメージを持たれていたため、産業遺産を活用した最新プロジェクトを開拓する先駆的な創造性が求められていたといよいよと変更した。全世界的に平坦な地形なので、ここでは、高低差のある丘陵地帯が競争力として残されています。



シアトル/Seattle

シアトル・パークはアメリカ西海岸最大の公園。ガラスファクトリの跡地をオリンピック山脈を背景とした公園として位置している。面積は7.7ヘクタールを有する広大な公園である。この公園は、工業遺跡が公園として生まれ変わった世界でも初めてのケースである。以前は、工業遺跡が公園として生まれ変わった世界でも初めてのケースである。以前は、工業遺跡が公園として生まれ変わった世界でも初めてのケースである。以前は、工業遺跡が公園として生まれ変わった世界でも初めてのケースである。



研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

研究旅行のテーマ：

都市における産業遺産の価値の再確認-遺産と街と自然の調和-

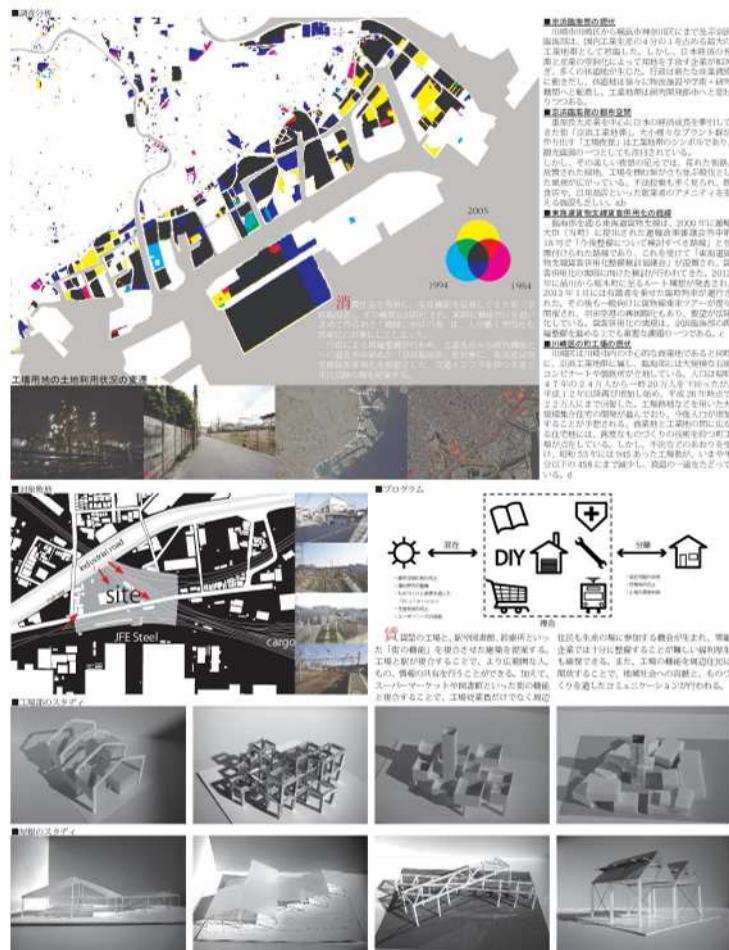
ドイツ・エッセン/ツォルレフライン炭鉱「ドイツ最大の炭鉱」

アメリカ・シアトル/ガス・ワークス・パーク

「世界初の工業跡地が公園」

このテーマに沿って二つの都市における産業遺産の価値観の比較を行います。また、現地でのサーベイを含め、地元の人々からの聞き取り調査を積極的に行い、今日の産業遺産の果たすべき役割を再確認できればと考えています。

機械じかけの街-生産の場と生活の場の結節点-



旅行計画書

1. 研究旅行のテーマ

港湾地区の再開発と新たに作られる街並み

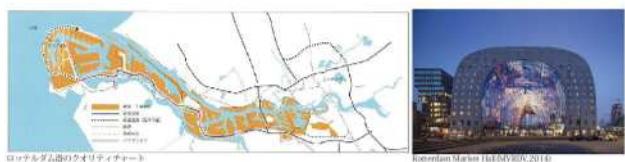
私は毎日「京浜工業地帯」を通る「JR鶴見線」を利用してしています。「京浜工業地帯」といえば「工場夜景」が有名で、私も電車に乗りながらダイナミックに変化するシーエンスが面白いと思っていました。それがきっかけで卒業研究では「京浜工業地帯」を取り上げることになりました。しかし、卒業研究を通して、京浜臨海部を「都市空間」の視点で観察した時、オフィス街のような人の密度は無いものの、確かに人が働く場所でもあるにも関わらず、あまりにもヒューマンスケールを逸脱した空間が広がっていたことに衝撃を覚えました。連續する無機質な壁、放置された緑地、散乱するゴミ。就業者のアメティを支える場が極端に少なく、徹底的に輸送に特化した街の作られ方が崩壊していました。そこで、私はそのような都市空間が作られた根本的な原因として「大量消費社会」があると考え、それを批判する提案として、生産の場に地域住民が参加し、ものづくりや、ものの修理を通して人々の京浜臨海部に対する意識を変えるできるような提案を行いました。しかし、卒業設計では地域住民と町工場の関係にのみ焦点が当たって、景観的な提案ができていませんでした。その反省から、私は港湾都市の景観について研究してみたいと思いました。このトラベルスカラシップに応募しました。調査対象の都市としては、京浜臨海部との比較として、同じ港湾都市で、世界最大規模の工業・港湾地区へと発展したオランダのロッテルダムを考えています。



2. 訪問予定の国

オランダ ロッテルダム

世界最大規模のロッテルダム港港島のリーダーシップの下、ポート・ビジョン 2020 で、目標すべき将来の姿明らかにされ、優先的に実行すべき 5 つのプロジェクトが打ち出されています。中でも現時点で重点的に進められているのが、マースフラクト 2 埠頭整備による港湾・工業機能の集約とシティ・ポートの複合市街地への再開発です。マースフラクト 2 の埠頭整備により、ロッテルダム中心部に近いシティ・ポートは、従来の役割を終え、都市的機能を持つ複合市街地へと開発されています。その状況が、生産機能から研究機能への道を歩み始めた現在の京浜臨海部に似ていると考え、長い歴史を持ちつつ、工業化された港湾地区的景観がどのように再編されるかを調査してみたいと思いました。



卒業設計のタイトルと概要

タイトル 「機械じかけの街-生産の場と生活の場の結節点-」

消費社会を背景に、生産機能を拡張してきた街「京浜臨海部」。その極度に目的化され、純粹に機能だけを追い求めて作られた“機械じかけの街”は、人が働く空間を効率化の対象にしてしまった。

行政による再編整備が行われ、工業生産から研究機能への道を歩み始めた「京浜臨海部」を対象に、東海道貨物支線貨客併用化を前提とした、交通インフラを持つ生産の場を提案する。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

テーマ：港湾地区の再開発と新たに作られる街並み

訪問予定都市：オランダ ロッテルダム

長い歴史を持ちつつ、工業化された港湾地区の景観がどのように再編されるかを調査してみたいと思いました。

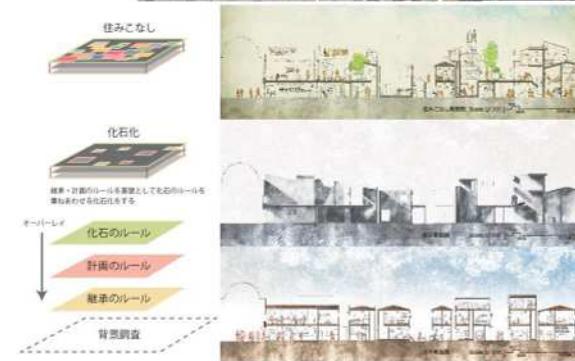


小山荘家族物語

一生きられた化石と住みこなす日々

東京には開発により壊される運命にある街が多く存在する。武蔵小山の商店街の横丁も開発が決定され、戦後から形成されてきた街並みが大きく変わってしまう。ここに、豊かな親しみ深い路地空間を継承しつつ、安全で長期的発展をする都市をつくるために建築と住まいをわける方法論を提案し、都市中心部からきた一街区開発の飛び火に対するアンチテーゼを唱える。

住人の生きられた証をRC建築躯体に置換し、段階的に共同建替えを行う。3つのルールとともに、既存木造壁をすべてRCに見立てて間引き図式で余白をつくっていく建築を「生きられた化石」と呼んだ。そこに住人が木造で床室を自由にめぐみ、住みこなすことによって住居空間となる住まいを設計した。



風景の均質と混沌/近現代に成立したアジア都市の公共空間の本質

研究テーマ

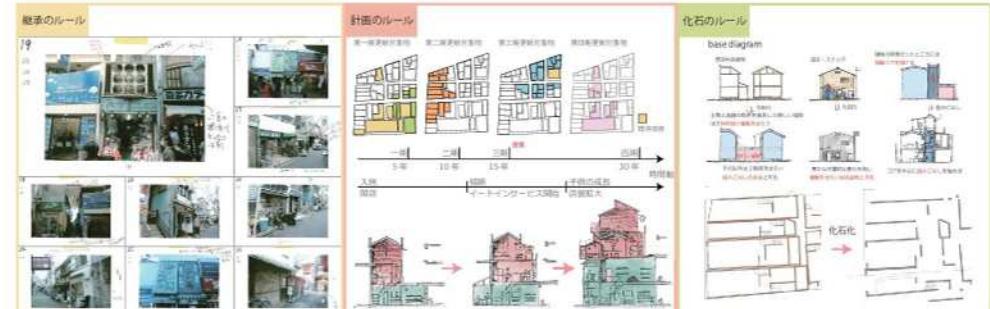
現代における美しい街並みとは?という問いに、迷わず答えることは難しい。近代はモニターズを代表するように「均質化」することの価値観を重視、建築は変わらざるものとして生活を支えていた。しかし、ベン・チューリングの「less is bore」と揶揄したように、現代において建築は美しさ以上に空間と生活の豊かさが求められている。

卒業設計では、今まで厳選し精査されてきた街の記憶に対して無縫隙に働く資本主義の力に疑いを持ち、自分の育った街である武蔵小山がまさにそのような危機にあることから、今後の豊かさが今以上に実現していくことを考えた。そしてそのためには、建築による風景と生活による風景の境界線を再考するところから始めた。つまり均質と混沌との境線線である。これには、建築することが人間に余裕をも与えて憩いを創出する行為だし、生きてることがこの街から遠ざかれていくことの答えが隣接にある。化石化と呼んでる行為には、空間の本質を残しながら街が安全に長期的発達をするための計画と設備を備え、最低限の制限をあたえるのである。そして、同じ価値観を共有する施設と建築家により住みこなすことで初めて集合住宅が作られていく、ということを提案した。

この卒業設計を行ったことにより日本、特に東京でよく見られるような木造密集地域だけではなく、近く気象条件による風土を持つ、歴史や民族的な背景とは違ったアジア都市に興味を持った。特に、近現代に成立し、西洋的な街並みの概念が知られている状況の中で作られた街並みを研究したい。そこまで3点を着目する。

- 1.都市スケールと人間スケールから比較する街並みの均質と混沌
- 2.風景を継承するための更新する本質と残り続けるもの
- 3.人々のふるまいでによる公共空間と共有空間の活用

上記3点を各アジア都市に残された近現代の街並みと東京の消えゆく街並みについて比較することで、それぞれの共通する本質を明らかにしたい。また、この研究旅行を自分の研究テーマである「建築と生活」についてより広い視野を得るためにしたい。



卒業設計のタイトルと概要

タイトル 小山荘家族物語 一生きられた化石と住みこなす日々

東京には開発により壊される運命にある街が多く存在する。武蔵小山の商店街の横丁も開発が決定され、戦後から形成されてきた街並みが大きく変わってしまう。ここに、豊かな親しみ深い路地空間を継承しつつ、安全で長期的発展をする都市をつくるために建築と住まいをわける方法論を提案し、都市中心部からきた一街区開発の飛び火に対するアンチテーゼを唱える。

住人の生きられた証をRC建築躯体に置換し、段階的に共同建替えを行う。3つのルールをもとに、既存木造壁をすべてRCに見立てて間引き図式で余白をつくっていく建築を「生きられた化石」と呼んだ。そこに住人が木造で床室を自由にめぐみ、住みこなすことによって住居空間となる住まいを設計した。

研究旅行のテーマと訪問予定の国(都市)

テーマ 風景の均質と混沌/近現代に成立したアジア都市の公共空間の本質

訪問予定都市は上海と台湾。建築が規定する均質と生活が作り出す混沌の関係性を近現代に成立したアジア都市の空間を比較し、共通する本質を明らかにし、日本の街並みの分析につなげたい。



今までのテーマ 街並み自転車旅、脱資本主義旅



日本の裏社会構造トライアングル自転車旅



日本をはじめとしたアジアでは自然と密接にかかり、暮らしと結びついてきた。そしてヨーロッパでは街並み自転車が盛んな、計画され、美しいものが並んでいる。

そうしたなかで卒業旅行では、今まで訪れてきた街並みを取り入れ自然が残されている都市における財産となった。

卒業旅行と街並みとの関係

①主にヨーロッパのヴァニチアや、タイのブケットの水上交通を琵琶湖へ

そしてインドのヴァナラシの暮らしを滋賀県の湖岸全城を対象として新しい暮らし。

②都市全体を創造されたイングランドのチャーチガーデン・ブリッジ。それは日本において滋賀県の水と人のつながりを見直し、全体の循環できる都市として実現した。

今後の歩道と街への方針性

今までの街並みを日本と比較し、世界に位置づけるための研究を今までしてきた。けれどもそこにはまだ見た見えない部分がある。それは社会構造が似ているからだ。そこに限界がある。ヨーロッパの街並みを統一してしまったことが問題で書かれた「シェネックシティ」とその代表的なものドニューブである。都市の密度を知るために赴き、その後は街並みが似たか違うかを抜きにした方が幸せに助けてくれる街並み。それが社会主義構造のキューバであり首都のハバナを舞台にライフスタイルと街並みを比較して美しいかと思う。チャーチガーデンと似てように個人の建築家が計画したブラジルのブラジリア。スケールは大きく異なるが私の前のバス停、ヨーロッパも自転車で行き、五感で街を知った。そこには机上だけでは見えてこない部分が多く潜んでいた。

卒業旅行では工事といわれる自転車の可能性、ヨーロッパにはない羽衣である豆屋の地形を生みた自転車サクルソーリスで経済を変えていくという課題である。しかしそこには限界があった。もとと社會を一つづつ、人と一人ずつのつながりをもんと考えていかなければならぬ。それを深く、日本は物理的にも社会的にも問題の地に出ていく。そこに限界がある。そこにはどうなもののかをフィールドワーク、ヒアリングを通して研究していくと思う。それを日本に持ち帰り、社会的構造を相似したうえでの街並みの美学を新たに導き出す。これからハンドルだけではなく、お金、人、自然が上手く連携し、人々の新しい幸せに繋がるような社会提案をこれまでにない。

そのためこの地で旅を知り、日本とは異なる裏側の社会構造を知り、日本社会に新しい風を吹かせたいと思う。



卒業設計のタイトルと概要

滋賀県は琵琶湖を中心とした完結性の高い地理的・歴史的空间で、自給自足の循環型社会。滋賀は環境史を考える上で最適のフィールドといえる。琵琶湖総合開発によって埋め立てられた水運の拠点として栄えていた港に着目する。観光業として連携させ、山と琵琶湖を自転車、徒歩で運べる最大寸法のサイズの木材を規格化し、道中に落ちている廃材も含め、ゼロエミッションで往復し、一人一つの家具を製作する。家具を組み合わせ、小屋を作製する。そうして里の資源で非電化で暮らせる宿泊施設を建設し、その過程の中で地元の人との対話を生む。それを滋賀の各地で展開することで30年後にインフラが喪失した際にも機能する港が各地に生まれる。それを滋賀の18箇所各地で展開させる。環境県滋賀として卒原発に繋がる港を生み、土人よし、風人よし、地域よし、環境よし、防災よしの五方よしの社会をみんなで作り上げていく。

研究旅行のテーマと訪問予定の国（都市）

訪問予定の国は大きく3つ。1つ目は連邦共和制国家であるブラジル首都ブラジリア、2つ目は資本主義国家であるアメリカのニューヨーク、3つ目は社会主義国家であるキューバの首都ハバナ。これら3つを車ではなく、バスでもなく、自転車で巡る旅。研究旅行テーマは日本の裏社会構造トライアングル自転車旅。アジアの混沌とした場所、ヨーロッパの計画都市に比べて社会的な背景が街にもたらす空間を肌で感じ、社会構造と都市の成り立ちをフィールドワーク、ヒアリング手法により都市構造を5感で感じながら分析する。都市を紐解き、日本において、今後どのような都市が可能性としてなりうるのかを模索する。

③連邦共和制国家 ブラジル ブラジリア



ラテンアメリカ最大の経済規模であり、同時に世界で7番目の経済規模で、南アメリカに位置する連邦共和制国家である。チャーチガーデンとの比較、自転車での可能性を模索。